

張我軍の日本語教育実践

—1930、1940年代の中国大陆における「日本国籍」

台湾人による日本語教育の一側面—

賈 鵬 飛

A Study on Zhang Wojun's Japanese-education Practice :

An aspect of Japanese-education in mainland China (1930s – 1940s)

conducted by Taiwanese with “Japanese nationality”

Jia Pengfei

20 世纪 30 年代，特别是九一八事变之后，中国大陆的日语学习者急增，各种日语学习书和参考书大量发行，掀起了一股日语学习的热潮。在当时的日语教育者中，除在华日本人、日本留学归国的中国人之外，还有一特殊身份的群体——“日本国籍”台湾人。作为首位在中国大陆高校教授日语的台湾人，张我军便是其中的佼佼者。他不仅身兼北京数所高校日语讲师，还著有多种日语教材，对当时中国的日语教育做出了很大的贡献。但在从事日语教育之前，张我军也对日本的殖民统治进行过强烈的反抗。那么，作为日本殖民统治的反抗者的张我军，其进行日语教育的目的何在？本稿围绕此问题在分析了其从事日语教育之前的文学和社会活动之后，对张我军的日语教育实践内容进行了考察。

在 1937 年 7 月 7 日卢沟桥事变以前，张我军将“反帝、反战争”思想和社会主义思想纳入其日语教育的内容中，这不只体现了其反抗精神的延续，也可以从中了解其对社会主义思想在中国的传播所做出的贡献。但卢沟桥事变后，其所著日语教材不仅数量骤减，且“反帝、反战争”等内容也不复存在。此种巨大转变究竟是因其抵抗精神的磨灭，还是当时政治环境下的无奈之举？现阶段因资料不足还不能够下定论。但对于张我军研究来说，则是今后非常重要的课题之一。

关键词：“日本国籍”台湾人，日语教育，反抗殖民统治，社会主义思想

1. はじめに

1930年代に入り、特に九一八事変（満州事変）以降、中国大陸において日本語教育施設と日本語学習者が増加し、日本語学習書の出版も活発になり、日本語ブームが到来したといわれている¹。当時の主な日本語教育者には、日本人と留日中国人のほかに、「日本国籍」台湾人²もいる。その中の張我軍は中国大陸の大学で日本語を教授した最初の台湾人³で、北京⁴を主な舞台として日本語学習書を作成しただけでなく、日本語学習を中心とした雑誌を編集し、日本語学習塾を開設するなど、多様な日本語教育実践活動を行なった。当時の中国人の日本語学習に大きく貢献したと考えられる。しかし、日本語教育に携わる前の張我軍は著述と翻訳を通じて日本の台湾での植民統治に反対していた。したがって、日本の植民統治の反抗者であった張我軍は、日本の植民地台湾出身のステイグマとしての日本語能力を生かして日本語教育に携わる理由は何か、どのような日本語教育を行なったのかなどを検証する意義は非常に大きい。

張我軍に関する研究は1970年代以降、本格的に行われてきた。今までの研究においては、張我軍は台湾新文学運動の啓蒙家、創始者として高く評価されている⁵。また、日本文学の翻訳における業績と貢献もある

1 1930年代の中国大陸における日本語ブームについては孫安石「戦前中国における日本・日本語研究に関する資料の調査報告」（『神奈川大学言語研究』25、2003年）を参照。

2 1895年に中日甲午戦争（日清戦争）の敗戦により、台湾は日本に割譲されて日本の植民地になった。「下関条約」により、1897年5月8日を過ぎても台湾、澎湖に留まった人は「日本国民」とみなされた。

3 秦賢次「台湾新文学運動の奠基者—張我軍」張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、342頁

4 北京の名前については1928年6月に南京国民政府が「北京」を「北平」に変え、1937年10月に日本支配下の傀儡政権が「北平」を「北京」に変えた。本稿では読み手に混乱が生じないように「北京」に統一した。

5 張我軍の文学貢献に関する主な研究には、陳少廷「台湾新文学運動の開始—新旧文学的論戦」（張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、271-277頁）、葉石濤「張我軍与台湾新文学運動」（張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、279-282頁）、秦賢次「台湾新文学運動の奠基者—張我軍」（張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、332-351頁）、林瑞明「撐起台湾新文学運動的大旗—張我軍和他的文集」（張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、445-450頁）などがある。

程度認められている⁶。しかし、日本語教育の視点からの張我軍研究は不足しており、王昇遠・周慶玲⁷による研究だけがある。王昇遠・周慶玲は編集者、著者、教授者という三つの側面から張我軍の日本語教育における貢献を概括的に述べたが、張我軍の生涯におけるその日本語教育実践活動の位置づけ及び彼の日本語教育の目的と内容については触れていない。本稿はまず日本語教育に携わる前の張我軍の文学活動と社会活動の特徴を分析し、張我軍の日本語教育の実践活動を踏まえ、彼の日本語教育の目的と生涯における日本語教育の位置づけを考察した。

2. 日本語教育に携わる前の張我軍

張我軍は日本語の教授者と翻訳家として1930、1940年代の北京で活動したが、日本統治下の台湾で6年間、小学校レベルの日本語教育を受けただけで、日本語に精通するようになったのは、主に独学に頼ったからである⁸。このことは努力なしでは不可能であったと想像できる。この原動力はいったい何か、その原動力が張我軍の日本語教育実践とどのようなつながりがあるのかを明らかにするには、日本語教育に携わる前の張我軍の活動を分析する必要があると考える。本章ではこれまでの張我軍についての研究を踏まえ、張我軍が北京に定住しはじめた1926年を境に、日本語教育に携わる前の張我軍の活動を二つの時期に分けその主な文学活動と社会活動の内容、目的を概括的に考察する。

2.1 台湾新文学運動の啓蒙家としての活動期（1902.10～1926.06）

張我軍は1902年台湾台北県板橋市に生まれた。原名は張清榮である。

6 日本文学の翻訳における張我軍の貢献に関する研究には、張泉「張我軍與淪陷時期的中日文学関聯」（張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、247-262頁）、王向遠『王向遠著作集—日本文学漢訳史』（2007年、寧夏人民出版社）などがある。

7 王昇遠・周慶玲「中国日語教育史視閥中的張我軍論」（『台湾研究集刊』2009年第3期、99-106頁）

8 張光正「張我軍与中日文化交流」張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、244頁

1895年に中日甲午戦争（日清戦争）の敗戦で台湾は日本の植民地になったことから、張我軍は生まれた時点で既に「日本国籍」を付与されていた。そして、1909年4月から1915年3月まで台北板橋公学校在籍し、日本語を「国語」として勉強した。卒業後、台湾にある日本人経営の靴屋で2年余り働いた。その後、公学校時代の先生であった林木土の紹介で、台北新高銀行の給仕に採用され、勤勉なところを認められて1年余りで雇員に昇進した。また、台北の剣樓書房で清朝の秀才であった趙一山について漢文を学んだ。1921年に転勤で廈門に行き、余暇を利用して廈門の同文書院で漢文を学んでいたが、1923年7月に台湾の商業界の不況により張我軍が当時勤めていた新高銀行廈門支店は解散になった。その後、張我軍は解散手当を持って上海に一時滞在し北京に行き、国立北京大学への進学を目的に国立北京師範大学（以下は北師大）⁹付属夜間部補習班で勉強した。しかし、1924年9月に北京大学の聴講生を受験したが合格できなかった。そして、同年10月にお金が底を突き台湾に戻り、台北で『台湾民報』¹⁰の編集者を担った。

この時期の張我軍は主に台湾新文学運動の啓蒙家として評価されている。張我軍は北京で見聞した中国の新文学の影響を受け、台湾に戻って『台湾民報』の編集者を担う中で、「糟糕的台湾文学界」¹¹（「めっちゃくちゃな台湾文学界」）などを発表して、漢詩漢文で創作した台湾文壇を批判し、中国大陸の「文学革命」と新文学作品を台湾に将来し、自らも

9 「国立北京師範大学」の名前については、1923～1927.7は「国立北京師範大学」、1927.8～1928.11は「国立京師大学校師範部」、1928.11～1929.8は「国立北平大学第一師範学院」、1929.8～1937.9は「国立北平師範大学」と呼ばれた。本稿では「国立北京師範大学」に統一した。

10 『台湾民報』は1923年4月東京で発行され、1927年8月正式に台湾で発行された新聞である。「台湾青年」とその後継の雑誌『台湾』を前身とする。

11 『台湾民報』（第2巻24号、1924年）に掲載。

白話文で多くの詩と小説を創作した。また、台湾新文学の「揺籃期」¹²において、「最も重要なものは張我軍の台湾新文学の本質、内容、形式等を論じた多くの評論である。張我軍の評論の特徴は、台湾新文学を大陸文学全体の中の一環として見なし、同時に当時の台湾が日本統治下の植民地であるという政治的事実を考慮の外においたことである」¹³と指摘された。

また、この時期の張我軍は「南支那に於ける排日対策」¹⁴を発表し、「上海台湾人大会」¹⁵に出席して発言し、台湾総督府の陰謀と暴政を直接批判した。「田川先生與台湾議會」¹⁶を発表し日本が台湾で実施した同化政策に強く反対した。日本の台湾での植民統治の真相を暴いて台湾人の抵抗意識を喚起するために、「農民問題二件」¹⁷「大婚二十五年御賜下金と植民地の教化事業」¹⁸『殖民政策下の台湾：弱少民族の悲哀』¹⁹などの日本語文章を中国語に翻訳して発表した。

以上により、この時期の張我軍は日本の台湾での植民統治と同化政策への抵抗を念頭において文学活動や社会活動を行なったと読み取れる。張我軍が日本語教育に携わった後、このような抵抗意識が一貫していたかどうかについて、本稿では張我軍の日本語教育の内容によって考察する。

¹² 葉石濤（2000）により、台湾新文学の「揺籃期」は1920年の『台湾青年』創刊から1925年の頼和が最初の散文「無題」を『台湾民報』に発表するまでの5年間である。

¹³ 『台湾文学史』（葉石濤著、中島利朗・澤井律之訳、2000年、35頁）

¹⁴ 雑誌『台湾』（第4年第7号、1923年）に掲載。

¹⁵ 「上海台湾人大会」は蔡惠如、彭華英、許乃昌などが当時上海にいた十数人の台湾人留学生を集め、台湾を日本の植民統治から離脱させることを目標として創立した組織の会である。（前掲注3、333頁を参照。）

¹⁶ 『台湾民報』（第3巻3号、1925年）に掲載。

¹⁷ 訳文「農民問題二件」は『台湾民報』（第3巻第9号、1925年）に掲載。原作者は『朝日新聞』である。

¹⁸ 訳文「大婚25年御下賜金と植民地の教化事業」は『台湾民報』（第62号、1925年）に掲載。原作者は安部磯雄である。

¹⁹ 訳文「弱少民族的悲哀」は『台湾民報』（第105号～第115号、1926年）に掲載。原作者は山川均である。

2.2 国立北京師範大学に就学した時期（1926.6～1929.6）

1926年6月、張我軍にとって3回目の北京行きになった²⁰。そして、同年9月に中国大学の国学学部に進学した。1年後北師大の国文学部の3年次に編入し、1929年6月に卒業した。日本が植民地で実施した教育は愚民教育で、それに台湾と大陸の教育課程の違いが大きく、当時中国大陸に留学した台湾人学生の多くは、希望通りに進学できなかった²¹。しかし、張我軍は中国大陸の大学の国文学部を卒業した最初の台湾人である²²。張我軍が極めて高い学力を持っていたことが窺える。

この時期の張我軍は台湾を離れて北京に住み始めたが、台湾のことを常に憂慮していた。1926年8月に張我軍は魯迅宅を訪ねて『台湾民報』を四冊魯迅に贈り、「中国人は台湾のことを忘れたようで、誰一人として台湾のことについて取り上げていない」と魯迅に訴えた²³。また、1927年3月に同じく台湾人留学生の蘇維霖、洪炎秋、宋文瑞、呉敦礼などと共に『少年台湾』という月刊誌を創刊した。張我軍は編集長として創刊号に載せた『『少年台湾』発刊詞』『『少年台湾』的使命』の中で創刊の目的について以下のように述べている。

とにかく、本誌には二つの目的がある。一つ目は台湾人のために思想と知識の交流機関を作ることである。二つ目は台湾と祖国の間に交流の架け橋を作ることである。²⁴

²⁰ 1925年頃、張我軍は当時恋人だった北京在住の羅心郷を連れて台湾に出奔するために一度北京に戻ってきた。3回目の今回は学問を究めるために妻となった羅心郷と一緒に北京に戻った。（前掲注3、339-340頁を参照。）

²¹ 秦賢次「張我軍及其同時代的北京台湾留学生」張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、376頁

²² 同上書、356頁

²³ 前掲注3、340頁

²⁴ 張光正編『張我軍全集』（下集）、2012年、352頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「总而言之，本志有两个目的：第一是要为台湾人添一个思想知识交换的机关；第二是要为台湾与祖国间添一个交涉的桥梁。」

とにかく、現在の台湾では、話したくないなら話さなくてもいい。話したいなら思想の改造から始めるべきだ。この面においては『少年台湾』がいい効果を取ればと思っている。(中略)私の理想は思想の改造を主要なこととし、他のものを二の次とすることである。²⁵

以上により、張我軍は台湾から北京に渡り、台湾で得られない知識を求めただけでなく、大陸の新思想を台湾に紹介すると同時に、大陸人の台湾への関心を喚起したいことが窺える。しかし、第二期の雑誌の多くが当時の北洋政府に没収されたため、『少年台湾』は第二期を発行してから停刊となった²⁶。『少年台湾』による張我軍の思想改造の理想は実現できなかったと言える。

この時期の張我軍にはもう一つ注目しなければならない点がある。即ち、社会主義思想とプロレタリア文学に関心をもち始めたことである。1929年に張我軍などの12人は北師大で「新野社」を創立し、1930年9月に『新野月刊』を創刊した。張我軍は創刊号に「从革命文学到無産階級文学」(「革命文学からプロレタリア文学へ」)を発表し、プロレタリア文学についていろいろな見解を打ち出した。この頃、日本の社会主義政治思想家とプロレタリア作家の著書と文章を翻訳したことがあり、日本のプロレタリア作家の葉山嘉樹と文通を続けていた。しかし、『新野月刊』は一期だけの発行で終り、続けられなかった理由として、当時の国民党政府が実施した言論統制のためだと考えられる²⁷。

²⁵ 張光正編『張我軍全集』(下集)、2012年、117頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「总之、在现状下的台湾，不想说话则已，若想说话，似应由思想改造入手。所以我希望，如果《少年台湾》的出世，能收多少效果，就在这一方面。(中略)我的理想，是以思想改造为主，其余为宾罢了。」

²⁶ 前掲注21、375頁

²⁷ 何標「張我軍与“新野社”」『台声雜誌』台声雜誌社、1994年2月、47頁

張我軍は就学期間がわずか3年であったが、『少年台湾』『新野月刊』の創刊などを行ない、多くの中国人に新思想を宣伝した。しかし、当時の政治状況により、いずれも長く続けられなかった。このように文章を通じて直接新思想を宣伝して国民の思想改造を行う方法が実行できなかった経験は、その後、文学創作を一時停止して日本語教育に全力を傾けた理由の一つであろう。また、社会主義思想とプロレタリア文学がこの時期の張我軍に大きな影響を与えたと考えられる。このような影響は張我軍のその後の日本語教育と関連があるかどうかについては、次章で張我軍の日本語教育の内容を分析した上で考察する。

3. 張我軍の日本語教育実践

張我軍は53年という短い生涯の中で16年間にわたり日本語教育に携わっていた。北京の数か所の大学で教鞭を執り、多くの日本語教材を作成し、日本語学習の雑誌を創刊するなど、多様な日本語教育実践を行ない、中国人の日本語学習に大きく貢献したと考えられる²⁸。また、1930年から1937年まで主業であった文学創作は、ほとんど行なわれなかった。日本語教育に全力を傾けた時期だと言える。日本の植民地出身のステイグマとしての日本語能力を生かした張我軍の狙いは何か、激動の社会において張我軍の日本語教育の実践活動の実態を明らかにし、そこには一貫性があるのかを探る。本章では盧溝橋事件（1937年7月7日）を境に二つの時期に分け、先行研究を踏まえ張我軍の作成した日本語教材や雑誌、張我軍の下で勉強した学生の残された証言に基づき、張我軍の日本語教育の実践活動を考察する。

²⁸ 前掲注3、344頁

3.1 北京淪陥前の日本語教育実践（1929.6～1937.7）

3.1.1 日本語講師と日本語学習塾

1929年に張我軍は日本語に精通しているということで、北師大を卒業してから、すぐ北師大の日本語講師として招聘され、初めて日本語教育の舞台に登場した。その後、北平大学法学院、中国大学、華北学院の日本語講師を兼任した。また、家に「基礎日文班」という日本語学習塾²⁹を開設した。当時の名士として知られている成舎我³⁰、雷嗣尚³¹などの多くの人がある日本語学習塾で勉強していた。この時期、張我軍が日本語を教授した様子についての資料は少ないが、以下のような当時の学生たちの回想から張我軍の日本語授業は非常に人気があったことが窺える。

台湾からきた張我軍先生の授業も聴きにきました。彼は中国大学の専任講師ではなかったのですが、その授業は、文章表現や文章表現にまで及ぶたいへん興味深いものでした。³²

日本語をもっと勉強しようと思って、中国大学でも第二外国語に選びました。先生は張我軍といって、台湾出身の人でした。著書や翻訳書などをたくさん出して、日本の領事館の人とも親しくしていました。張先生は自分でテキストを作成し、週に何回か教えてくださいました。（中略）張先生はとてもまじめで、彼のク

²⁹ 張我軍の日本語学習塾の開設時間ははっきりしていないが、中国の山西大学の学長であった甄華（当時、北平大学の学生）の回想によると、彼が1931年前後張我軍の日本語学習塾で勉強していたとある。

³⁰ 成舎我（1898～1991）は原名が成勳、当時ジャーナリストで、1933年に「北京新聞専科学校」を創設した。

³¹ 雷嗣尚（1906～1946）は1936年11月から1937年7月まで北平市社会局の局長を担当した。

³² 鍾少華著『あゝのころの日本－若き日の留学を語る』日本僑報社、2003、121頁。回想者の林林（1910～2011）は当時中国大学の学生で、新中国成立後は中国対外友好協会副会長、中日友好協会副会長をつとめた。

ラスは学生がたくさんいました。説明ははっきりとしていました。³³

もともと私はほかの人について日本語を勉強していましたが、日本語能力を高めるためにお父さん（張我軍のことを指す）のお宅の日本語学習塾に行って勉強していました。³⁴

3.1.2 日本語教材の作成

この時期の張我軍は大学の日本語講師と日本語学習塾の開設のほかに、多様な日本語教材（表1）を作成した。1931年から1937年までの6年間に8種類の日本語教材を作成したのは、当時の日本語教育者には稀なことである。また、「(中国の日本語教育では)日本語学習の提唱と言えば、清末の洋務派が一番早い。実践躬行して著書を提唱したのは梁任公で他と肩を並べる者はいない。日本語教育関係の著述の影響力から言えば、張我軍に匹敵するものはいない。」³⁵と王昇遠（2009）が述べたように、当時の日本語学習者に大きな影響を与えたと考えられる。これらの教材の使用目的により、「自修教授両用」と「完全自修」という二種類に分けることができる。この二種類の教材の特徴を明らかにするために、本稿は教材間の関連と作成目的を中心に張我軍の作成した日本語教材を分類し考察する。

³³ 鍾少華著『あのころの日本－若き日の留学を語る』日本僑報社、2003、167頁。回想者の陳辛仁（1915～2005）は当時中国大学の学生で、新中国成立後は文化部副部長などをつとめた。

³⁴ 張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、42頁。回想者の甄華（1908～1994）について前掲注29を参照。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「原来我向别人学习日语，为了加深和提高日语水平，于1931年前后，找到你父亲住处（西单商场对面，是察院胡同还是手帕胡同我记不清了）日文补习班学习。」

³⁵ 王昇遠「从本体趣味到習得訓誡：周作人之日語觀試論」『魯迅研究月刊』2009（7）、61頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「论日语学习倡导之早，难以企及晚清洋务派；论身体力行、著书倡导之勤，无法比肩梁任公；论日语教育论著受众之广、影响之大，又无以媲美张我军。」

表1 張我軍の作成した日本語教材（北京淪陥前）

書名	出版社	初版発行年
『日語基礎讀本』	北平人人書店	1931.6
『日本語法十二講』	人文書店	1932.9
『日漢對譯詳解高級日文自修叢書』（全3種） ³⁶	北平人人書店	第1種：1934.3；第2種：1934.9
『現代日本語法大全：分析篇』	北平人人書店	1934.8
『日語基礎讀本自修教授参考書』	同上	1935.1
『現代日本語法大全：運用篇』	同上	1935.3
『高級日文星期講座』（全3冊） ³⁷	同上	1935.3
『標準日文自修講座』（全5冊）	同上	前期第1冊：1936.6 前期第2冊：1936.7 前期第3冊：1936.8 前期第4冊：1936.9 後期第1冊：1937.6

（*表1は王昇遠・周慶玲（2009）を参照し筆者修正後作成）

3.1.2.1 自修教授両用教材

『日語基礎讀本』は一番早く発行された張我軍の日本語教材で、初版の1931年6月から1937年6月までに10版³⁸を重ねた。また、10数か所の大学で教科書として採用され、張我軍の日本語教材の中では一番多く販売された³⁹。張我軍の開設した「基礎日文班」でも使われた教材でもある⁴⁰。本教材を使って日本語の書籍が読める能力を習得した学習者は1000人以上で、当時の日本語教師は最も優れた日本語入門書だと認め、

³⁶ 『日漢對譯詳解高級日文自修叢書』（全3冊）の3冊目は筆者未見。

³⁷ 『高級日文星期講座』（全3冊）は筆者未見。

³⁸ 初版より3版まで数か所改訂されていたが、4版は大きく改訂され、4版以降は改訂されていない。

³⁹ 前掲注3、343頁

⁴⁰ 筆者所蔵の『日語基礎讀本』（4版）には当時の学習者のメモ書きが残っている。メモには中国語で「购于宣内人人书店，用于著者之基础日文班。」とある。

第4版が発行されてから半年間で3000冊ほど販売されたという⁴¹。

『日語基礎讀本』は主に「文字と発音」「基礎語法」「模範文選」という三つの部分からなっている。その中の「基礎語法」の本文は90%以上が張我軍の作成したものである。序言の中で張我軍は『日語基礎讀本』の作成理念について、「読書を目的とした日本語学習は文法を重んじなければならぬ。文法を習得するには、すべての文法を読本の中に入れて置かなければならぬ。そうすれば、学習者は興味を持ち容易に習得できる」と述べた。これは張我軍の提唱していた教授法である。

教室での使用教材としても自修教材としても『日語基礎讀本』の使用が多いことから、学習者に効率的に日本語を習得させるために、張我軍は北師大と華北学院で使用されたプリントに基づいて補助教材として『日本語法十二講』を作成した。発行部数は2000冊である。その後、『日語基礎讀本』の新しく改訂された4版が発行されてから、補助教材としての『現代日本語法大全』（分析篇・運用篇）と『日語基礎讀本自修教授参考書』も作成した。『日本語法十二講』と『現代日本語法大全』（分析篇・運用篇）はいずれも山田孝雄の『日本文法講義』と『日本口語法講義』を種本とし、中国人日本語学習者の特徴を考慮して作成したもののだが、『現代日本語法大全』（分析篇・運用篇）は、内容の量が『日本語法十二講』の二倍以上で、講解も更に詳細になっている。

補助教材の中で特に注目すべきものは『日語基礎讀本自修教授参考書』である。この参考書は、張我軍自身の日本語教授経験に基づき、教授者と自修者に各課の目的、教授時間、使用参考書、要点などが提示し

41 『日文與日語』第2巻第4号、人人書店、1935、広告頁

42 張我軍編著『日語基礎讀本』（7版）人人書店、1937年、序言第1頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「以读书为目的而习日文，第一不可不注重文法。学习文法的方法，须溶化全部文法于读本之中，使学生不感枯燥，不感困难，容易记住，容易应用，然后始能收到美满的结果。」

である。張我軍自身も「この参考書と『日語基礎讀本』を合わせて使うと、自分の開設した「日文基礎班」で授業を受けたと同様の効果を収めることができる」⁴³と述べている。この参考書は現在の教師用指導書に似ているが、当時は非常に先進的なものだと言える。また、張我軍の「教授参考」の理念はその後の戦時華北淪陷区における日本語教科書作成にも大きな影響を与えたと考えられる⁴⁴。

3.1.2.2 完全自修用教材

当時の日本語ブームの下で、日本語自修学習者が増加し教材への需要も高まり、「一月通」「百日通」などと名乗った数多くの速成日本語教材が発行された。張我軍は速成では日本語の習得ができず、市販されている教科書では自修学習者に役立たないと考え、完全自修の社会人と優秀な日本語教師のいない学校の学生を対象に『標準日文自修講座』を作成した。この教材は『日語基礎讀本』と違い、文法についての説明と例文の講解はかなり詳しく、基礎段階の発音部分にはイラストで正確な口の形が示してある。張我軍の立てた作成計画によると、前期4冊は基礎口語文法を中心に置き、後期4冊は文語文、複雑な文法運用、上級の文範などを中心に合わせて8冊作成されたが、1937年6月に後期第1冊が発行されてから発行停止になった。その理由としては1937年7月に勃発した盧溝橋事件のためだと考えられる。

『日漢對譯詳解高級日文自修叢書』は中・上級段階の学習者向けに作成されたもので、「日本語文章+中国語訳文+註解」の形で日本語の文章を学習者に理解させる。これは張我軍が中・上級段階でよく使用する教授法である。「註解」では用言の活用や構文を中心に提示されている。

⁴³ 張我軍編著『日語基礎讀本自修教授参考書』、人人書店、1935年、序言頁

⁴⁴ 北京近代科学図書館編『初級日文模範教科書』（全3冊・1937年10月初版）には「教授参考」が入っている。

初級段階より、中・上級段階では学生の読解力や翻訳力の育成が更に重視されている。『高級日文星期講座』については現時点で筆者は未見だが、当時人人書店に出された広告⁴⁵によると、構造的には『日漢對譯詳解高級日文自修叢書』とほぼ同じである。

張我軍は当時の日本語学習者と教師の多様な需要に応えるために、教材の作成において自身の日本語教育経験に基づいた教授法を教材に取り入れ、「自修」と「教授」という二種類の教材及び補助教材を作成し、日本語は速成できるという当時の風潮に対し、学習段階により異なった内容と方法を採用した。したがって、張我軍のこのような当時の先頭に立った教材作成の理念は、その後の中国の日本語教材作成にどれほど影響を与えたのかを明らかにするのが、今後の張我軍研究において非常に重要な課題だと考える。

3.1.3 『日文與日語』⁴⁶と日本語教育関係の論述

この時期の張我軍のもう一つの重要な日本語教育実践活動は『日文與日語』を創刊したことである。『日文與日語』は1934年1月の創刊から、1935年12月の停刊まで全24期、北京の人人書店で発行された月刊誌である。北京大学教授の周作人と清華大学教授の錢稻孫は編集顧問であったが、80%以上の内容が編集長としての張我軍によって執筆された。每期3000冊ほど販売され、読者は北京だけでなく、上海、済南、杭州、広州、開封などにもいた。

『日文與日語』では日本語学習関係の各種講座以外に、最も注目すべきところは張我軍の日本語教育関係の論述(表2)である。その中の「為什麼要研究日文」(「なぜ日本語を研究するのか」)と「怎麼樣學習日文」(「どのように日本語を勉強するのか」)という2篇の文章は価値が

⁴⁵ 『日文與日語』第3巻第5号、1935年、広告頁

⁴⁶ 雑誌の表紙にある「日文与日語」は周作人が書いたものである。

認められ、『怎樣研究日語』⁴⁷という本に転載されている。これらの論述を通じて張我軍は日本語学習の必要性を述べ、また、当時の各種の日本語学習法のメリットとデメリットをまとめ、自身が考えた理想的な学習法と教授法を述べ、更に、当時の学校で行われた日本語教育が失敗した原因を分析した上で、「課程標準を制定するべき」などの現在でも適用できる対策を打ち出した。張我軍のこれらの論述は、張我軍自身の日本語教育観に関する研究だけでなく、1930年代の中国大陸の日本語教育実態に関する研究にとっても有力な手がかりになると言える。

表2 『日文與日語』における張我軍の日本語教育関係の論述

題名	掲載号
「為什麼要研究日文」	創刊号
「怎麼樣學習日文」	第1卷第2号
「怎麼樣學習日文(2)」	第1卷第3号
「為日文課程告學校當局」	第1卷第5号
「關於日文課程的另一忠告」	第1卷第6号
「日本の新聞與雜誌」	第2卷第2号
「日本羅馬字の問題」	第3卷第1号
「別矣讀者」	第3卷第6号
「二十五年以後的工作」	第3卷第6号
「日本の文章記録法與標點符號」	第3卷第6号

3.1.4 日本語教育の内容

張我軍が北京での就学期間に日本語文章を翻訳し生活の糧にしなが

⁴⁷ 『怎樣研究日語』は1934年5月に初版が上海の開華書局によって発行され、当時の「日語讀書會」によって編集された。その中には当時の日本語教育者であった葛祖蘭、蔣君輝などの論述が収録されている。

勉強していた⁴⁸ことから、彼が日本語教育に携わる最初の理由は生計のためであったことは、想像に難しくない。しかし、植民地出身のステイグマとしての日本語能力を生かして生活しなければならない張我軍は、強く日本の植民統治に反抗していた。そのような「抵抗意識」は日本語教育に携わった後、一貫していたかどうかなどの問題を明らかにするのは、張我軍研究にとって欠かせない課題である。それを解明するために、張我軍の作成した教材を手がかりに、初級段階と中・上級段階に分けて盧溝橋事件までの日本語教育の内容を考察する。

3.1.4.1 初級段階の内容

張我軍の初級段階での日本語教育の内容を明らかにするために、『日語基礎讀本』の「基礎語法」の全147の段落に対し、内容の持つ意味により分類した。147の段落の中で張我軍が自分の考えを表出したものとして52の段落（表3）があり、全体の三分の一ほどを占めていることから、日本語教育の場を借りて自分の思想を表す意図が窺える。

表3 『日語基礎讀本』の「基礎語法」に関する考察

主題	段落の数
反帝国主義、反戦争	11
社会主義思想、無産階級関係	10
社会、政治状況に対する批判と見方	7
価値観	5
革命精神と犠牲精神	3
恋愛観	3
考えた理想的な社会	2
勉強について	2
旧道徳を批判	2
言論自由を主張	1
人生観	1
文学についての考え	1
その他	4

段落の数から見ると、以下のような「反帝国主義、反戦争」の本文の内容が一番多い。その内容から見ると、日本語教育に携わる前のように日本の植民統治を直接批判した表現ではないが、これらの反帝国主義、反戦争の内容自体も植民地出身の人にとって抵抗意識の表出ではないかと考える。

戦争ヲ好ム國民ハ確カニ文明人デハナイ。⁴⁹

國民ノ多數ハ戦争ノ爲ニ極度ノ貧困ニ陥ツテラル。⁵⁰

正當ナ愛國運動ガ帝國主義國家ノ爲ニ妨ゲラレル。⁵¹

國家ノ存在マデモ帝國主義者ノ領土的野心ニヨツテ極度ノ危機ニ置カレテキル。平和ノ要求サヘモ武力萬能者ニヨツテ一蹴サレテシマヒマシタ。⁵²

平和な日を送り得る。幸福な生活を享受し得ます。人類がまだ戦争を捨て得ないから我々はこんな夢を見ることが出来ない。だが将来には期待し得よう。⁵³

段落の数が二番目に多いのは以下のような「社会主義思想、無産階級関係」の本文の内容である。ほとんどの内容は無産階級の立場に立っている意見である。これは張我軍が1930年代頃日本で流行した社会主義思想とプロレタリア文学の影響を強く受けたのではないかと考えられる。張我軍は日本語教育に携わる前にも雑誌を創刊し社会主義思想などを宣伝したが、当時の北京の政治状況などの原因で続けられなかった。そのため、文学創作の代わりに日本語教育で社会主義思想を伝えることも張

⁴⁸ 洪炎秋「懷才不遇的張我軍兄」張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、20頁

⁴⁹ 張我軍編著『日語基礎讀本』（7版）、人人書店、1936年、33頁

⁵⁰ 前掲注49、47頁

⁵¹ 前掲注49、49頁

⁵² 同上注

⁵³ 前掲注49、55頁

我軍の日本語教育の目的の一つだと考えられる。これについて、「社会主義の學説を教へることをえる。然し實行するを得ない。宣傳もすることをえませんさうだ」⁵⁴といった『日語基礎讀本』の本文の内容によっても窺える。

利子デ生活ヲスル。何モカモオ金デ買ヒマス。資本家トイフ者ノ生活ハ仲々愉快ダサウデス。之ニ反シ、労働者ハ血ト汗トデ食物ヲ換ヘテ來ル。⁵⁵

労働者はもう資本家に不當利益を貪らせません。政府も資本家に不當搾取を止めさせませう。これは現社会に階級鬥争を發生させない唯一の手段だ。⁵⁶

資本家は賃金労働なしには存立することが出来ない。⁵⁷

是れは民主主義に對する社会主義思想の影響に他ならない。いづれにしても、かういふ暴力行為は人類の獸性の一面を暴露してゐるに外ならぬ。⁵⁸

3.1.4.2 中・上級段階の内容

張我軍の中・上級段階での日本語教育の内容を明らかにするために、『日文與日語』の中の「中・高級日本語講座」と『日漢對譯詳解高級日文自修叢書』及び『高級日文星期講座』を分析対象に選んだ。張我軍が中・上級段階で採用した教授法は主に「日本語文章＋中国語訳文＋註解」なので、上記の教材中の日本語文章を取り出し表4、表5、表6を作成した。

⁵⁴ 前掲注49、55頁

⁵⁵ 前掲注49、46頁

⁵⁶ 前掲注49、56頁

⁵⁷ 前掲注49、77頁

⁵⁸ 前掲注49、81頁

表4 『日文與日語』における中・高級日本語講座の日本語文章

文章名	原作者	掲載巻・号数
「現代政治思想の主潮とその破綻」	大山郁夫	第1巻：創刊号、第2、3、4 5、6、7、8号
「セメント樽の中の手紙」	葉山嘉樹	第1巻：第2号
「『點心』自序」	芥川龍之介	第1巻：第2号
「正直であれ」	吉田絃二郎	第1巻：第3、4号
「侏儒の言葉」	芥川龍之介	第1巻：第3号
「静夜日記」	生田春月	第1巻：第4号
「論理學の性質」	速水混	第1巻：第5、6号
「雷雨の夜」	二葉亭四迷	第1巻：第5号
「晩秋の日」	小川未明	第1巻：第6号
「低能児」	加藤武雄	第1巻：第6号
「思想」	金子馬治	第1巻：第7号
「風文語文」	徳富蘆花	第1巻：第7号
「武器（侏儒の言葉）」	芥川龍之介	第1巻：第7号
「社會思想の部類」	高島素之	第1巻：第8号
「要談と閑話（文語）」	徳富蘇峰	第1巻：第8号
「母と蘆」	西條八十	第1巻：第9号
「浪漫的結婚と論理的結婚」	米田莊太郎	第1巻：第9号
「うれしさ（文語）」	幸田露伴	第1巻：第9号
「批評と鬥志（論文）」	片上伸	第1巻：第9、10号
「轉生（小説）」	志賀直哉	第1巻：第9、10号
「科學の特質」	石原純	第1巻：第10号
「社會思想史序説」	波多野鼎	第1巻：第11号
「芥川龍之介君よ（文語）」	菊池寛	第1巻：第11号
「少年の悲哀」	国木田独步	第1巻：第11、12号
「不潔を厭はぬ人々」	田上三郎	第1巻：第12号
「雨の趣味」	黒田鵬心	第2巻：第1号
「空想的社會主義」	堺利彦	第2巻：第1、2、3、4、5、6号
「菖蒲の節供」	島崎藤村	第2巻：第2号
「吾輩は猫である」	夏目漱石	第2巻：第3号
「漫畫坊ちゃん」	夏目漱石 近藤浩一路	第2巻：第4、5、6号 第3巻：第1、2、3、4、5、6号
「勝負事」	菊池寛	第2巻：第4、5、6号
「アメリカの發明界展望」	矢部利茂	第2巻：第4号
「空襲と民心の統制」	保科貞次	第3巻：第1、2号
「繪のない繪本」	林房雄	第3巻：第1、2、3号
「現代世界外交思潮及びその動向」	芦田均	第3巻：第3、4、5、6号
「悪魔」	谷崎潤一郎	第3巻：第4、5、6号

表5 『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』(第1種、第2種)

文章名	原作者	掲載冊
「社会科学とは何か？」	杉山栄	第1種
「社会の本質」	長谷川如是閑	第1種
「個人意識と社会意識」	綿貫哲雄	第1種
「文学の本質に就いて」	平林初之輔	第2種
「政治と文藝」	青野季吉	第2種
「文学の読者の問題」	片上伸	第2種

表6 『高級日文星期講座』(第1冊、第2冊)

文章名	原作者	掲載冊
「道程を愛する心」	鶴見祐輔	第1冊
「事実と科学」	丘浅次郎	第1冊
「戦後国際経済概観」	村川堅固	第1冊
「一九三五年の極東情勢」	蘆田均	第1冊
「島」	薄田泣菫	第1冊
「大國の悲哀」	中央公論社説	第1冊
「最後の授業」	菊池幽芳	第2冊
「軍縮の基礎条件」	横田喜三郎	第2冊
「羨ましい人生へ」	大江專一	第2冊

以上の中・上級段階で張我軍が選んだ日本語文章から見ると、芥川龍之介、夏目漱石、島崎藤村などの文学作品以外に、社会学、論理学、政治思想、世界情勢などについての文章も多くある。これは日本語を通じて世界各国の学術文化を学ぶという清末以来の中国の自発的な日本語教育の社会的背景と合致していると考えられる。

また、特に注目すべきは大山郁夫、堺利彦などの社会主義思想者の文章と葉山嘉樹、平林初之輔などのプロレタリア文学の作品が見られることである。そこから初級段階と同様に日本語教育を利用して社会主義

思想を伝えるという目的が読み取れる。社会主義思想を日本語教育の中に取り入れた理由としては、張我軍自身が意識的に取り上げただけでなく、当時の日本語学習者の要望も考慮されたのだと考えられる。これについて、以下のような当時の学習者の回想からも窺える。

日本語を勉強したのはマルクス主義を知るためですが、日本の社会や文化についても知りたい気持ちがありました。当時はマルクス主義も日本文化の一つで、河上肇などはその代表でした。⁵⁹

張先生の指導を受けて、三つの方面において得るところが多い。(中略) (三) 彼の授業の内容の一部がマルクス・レーニン主義哲学なので、マルクス・レーニン主義哲学を学ぶ積極性を高めた。彼の指導と協力により、その後、私が日本に留学するのに役立てることができた。⁶⁰

この時期の張我軍は文学創作活動を一時停止したが、以上のように意識的に「反帝国主義、反戦争」などの内容を日本語教育の中に取り入れたことから、日本語教育に携わった後でも植民統治への抵抗意識がまだ続いていたことが分かる。また、「社会主義思想」に興味を持つ理由としては、日本の台湾での植民統治への反抗とつながると考えられる。『台湾民報』の編集者を担当した頃の張我軍が翻訳した「大婚二十五年御賜下金と植民地の教化事業」と『殖民政策下の台湾：弱少数民族の悲

⁵⁹ 鍾少華著『あゝのころの日本－若き日の留学を語る』日本僑報社、2003、168頁。

⁶⁰ 前掲注34、40頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「那时我经常到他家中，他们很热情地接待我，爱心地教育我，使我在三个方面受到教益：(中略) (三) 他的讲课内容，有一部分是讲马列主义哲学，他促进了我学习马列主义哲学的积极性。由于他的教育和帮助，也为我后来留学日本创造了良好的条件。」

哀』はいずれも日本の台湾での植民統治の真相を暴いた文章で、その文章の原作者の安部磯雄と山川均はいずれも日本の社会主義者であった。張我軍が社会主義思想に関心を寄せた原動力は日本の台湾での植民統治への抵抗意識であったと言えるが、他に何か理由があるかどうかを今後の課題として検討する必要がある。

3.2 北京淪陥後の日本語教育実践（1937.7～1945.8）

1937年7月に盧溝橋事件が勃発し、北京が淪陥したことで、張我軍は再び日本の支配下で生活せざるをえなかった。張我軍は自分の名声を利用して日本支配下の傀儡政府の官職に就くのが容易であったが、日本が敗戦した1945年8月まで傀儡政権下の大学の教職以外に何の官職にも就けなかったと指摘された⁶¹。しかし、映画『東洋平和の道』⁶²の制作、「大東亜文学者大会」⁶³、北京近代科学図書館⁶⁴主催の「日語基礎講座」などの日本による文化侵略と見なされた活動に関与したことも事実であった。この時期の張我軍について解明されていないところがまだ多く、彼が日本に協力した虚実についてまだ結論を出すことができないが、張我軍のこの時期の主業であった日本語教育の実態を明らかにするのは、彼の本心を探究する第一歩だと考える。

3.2.1 偽北京大学教授としての日本語教育活動

北京淪陥後、張我軍は偽北京大学⁶⁵の工学院、文學院日本文学系の教

⁶¹ 張光正「略论父亲的乡土性格和开放性格」張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、218-219頁；張光正「張我軍与中日文化交流」張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、235頁；前掲注48、22頁を参照。

⁶² 『東洋平和の道』は東和商事によって製作され、1938年3月31日に公開された。張我軍は作品の製作や撮影の進行に関わった。（晏妮『戦時日中映画交渉史』岩波書店、2010年、133頁を参照。）

⁶³ 「大東亜文学者大会」は日本の侵略戦争に協力することを目的として、日本文学報国会などが中心となって1942年から1944年まで3度開催された文学者の交流大会であった。

⁶⁴ 北京近代科学図書館は1936年に北京で開館した図書館で、当時の日本東方文化事業の一環で設立された。

⁶⁵ 1939.1～1945.8、日本支配下の傀儡政権によって創立された「北京大学」を指す。元の北京大学は昆明に移転し、国立西南連合大学と改称する。

授に就任し日本語教育に携わり、日本文学系の1、2、3年生の三つの専門必修科目を担当した。科目名は「日文講読」「日本現代文学選読(二)」「日本現代文学研究」で、毎週の授業時間数は10時間である⁶⁶。具体的な授業内容を示した資料が現時点で見えないが、当時の張我軍の授業を受けた宿白⁶⁷の回想によると、張我軍の授業内容には島崎藤村と武者小路実篤などの作品を取り扱ったとある⁶⁸。

3.2.2 北京近代科学図書館「基礎日語講座」の日本語講師

偽北京大学の教授以外、張我軍は北京近代科学図書館主催の「基礎日語講座」の講師を担当していた。『北京近代科学図書館館刊』⁶⁹に基づき張我軍の具体的な教授内容を表7のようにまとめた。張我軍は「翻訳法」「講読」「文法」などの項目以外に、師範科の「日語教授法」も担当した。また、張我軍は多くの講師の中でも唯一日本語の教授法を教えていた。これはおそらく張我軍が日本語教授法と教師育成について研究した経験と関係があったからであろう。本稿の3.1で述べたように張我軍は盧溝橋事件以前、既に日本語の教授参考書を作成し、また、日本語教育関係の著作にも日本語教師の資質について自分の考えを述べている⁷⁰。

⁶⁶ 王中「淪陥時期旅平台籍文化人的文化活動与身分表述——以張深切、張我軍、洪炎秋、鍾理和為考察中心」2010年、北京大学博士論文、51頁

⁶⁷ 宿白(1922～2018.2.1)は中国の考古学者で、1940から1944まで偽北京大学の史学学部 に在籍していた。

⁶⁸ 張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、44頁。

⁶⁹ 第5号と第6号の名前は『北京近代科学図書館館刊』である。

⁷⁰ 逃生(張我軍筆名)「關於日文課程的另一忠告」『日文與日語』第1巻第6号、1934、1-2頁

表7 北京近代科学図書館「基礎日語講座」における張我軍の担当科目

講座期間	クラス	科目名	毎週授業時間	教科書
1938.6.20 ~ 1938.9.10	第1期高級班	翻訳法	2	不明
1938.6.20 ~ 1938.9.17	第2期中級班 第2班	講読	4	北京近代科学 図書館編 『高級日文模範教 科書』(巻1)
1938.6.20 ~ 1938.9.17	専修科 第3班	文法	2	不明
1938.9.12 ~ 1939.2.17	師範科	文法演習	2	張我軍著 『現代日本語法大 全(分析篇)』
		日語教授法	1	不明
1938.9.26 ~ 1938.12.21	第2期高級班	講読	4	北京近代科学 図書館編 『高級日文模範教 科書』(巻2)
1939.1.5 ~ 1939.3.30	第3期高級班	講読	4	不明
1939.4.8 ~ 1939.7.21	第4期高級班 第1班	講読	4	不明
	第4期高級班 第2班	講読	4	不明

3.2.3 日本語教材と内容

日本語教材作成においては北京淪陥前と比べれば、この時期に張我軍が作成した教材(表8)は3種類しかなく、非常に少ないと言える。

表8 張我軍の作成した日本語教材(北京淪陥後)

書名	出版社	初版発行年
『最新日語基礎讀本』	天津世界圖書 公司	1938.1
『日語模範讀本』(全2巻) ⁷¹	日文與日語社	巻1:1939.2
『對譯日本童話集』(全2巻)	新民印書館	上巻:1942.10;下巻:1943.5

その中の『最新日語基礎讀本』は「最新」が付けられたが、北京淪陥前に発行された『日語基礎讀本』（4版以降の各版）の内容とほぼ同じで、「反帝國主義、反戦争」や「社會主義思想」などの内容もそのまま残されている。しかし、第1版しか発行されなかったことから、北京淪陥後、『最新日語基礎讀本』はあまり利用されていないことが推測できる。また、『最新日語基礎讀本』が発行された1年後、『日語模範讀本』が発行されたが、「反帝國主義、反戦争」や「社會主義思想」の内容は掲載されていない。

『對譯日本童話集』は1942年発行されたものであったが、張我軍は1935年12月に既にその作成計画を立てていた⁷²。1942年になってはじめてその計画を実行に移したことから、張我軍は北京淪陥前のように、日本語教育に精力を注いでいないことも読み取れる。童話集を日本語学習の補助教材にする理由としては、張我軍は童話によってその国の国民性を知ることができ、国民性からその国の風俗習慣が読み取れると考え、また、童話で使った言葉は簡潔且つ正確で分かりやすいことから、その国の言語の模範だと考えたのである⁷³。

北京淪陥期間の張我軍について解明されていないところが多くあるが、日本語教材の作成活動が減ったことや教材の中に取り入れた内容の変化により、日本に支配された淪陥区で張我軍の本心をそのまま表す自由はなかったことが分かる。したがって、張我軍の偽北京大学と北京近代科学図書館での日本語教育の目的は、主導側の日本の意図と対比させて今後検証する必要があると考える。

71 『日語模範讀本』（巻2）未見。

72 張我軍編『日文與日語』（第3巻第6号）、人人書店、1935年、6頁

73 張我軍編『對譯日本童話集』（上巻）、1942、新民印書館、序言頁

4. まとめと今後の課題

4.1 植民地出身による「抵抗意識」と張我軍の日本語教育実践

日本の植民地台湾出身の張我軍は同化政策下の日本語教育を受けたが、日本語教育に携わる前から日本の台湾での植民統治に抵抗し、文章や翻訳などを通じて日本の植民統治を強く批判した。その後、台湾を離れて中国大陸の大学に就学した時でも、台湾への憂慮と新思想の宣伝を止めなかったが、『少年台湾』『新野月刊』の創刊などを通じて直接、自身の思想を表すことができなくなった。その経験は張我軍に当時の言論状況を明確に認識させた。これは張我軍が文学創作を一時停止して日本語教育に全力を傾けた理由であろう。日本語教育は張我軍にとって最初は生計のための手段であったかもしれないが、日本語教材に意識的に取り入れられた「反帝国主義、反戦争」などの内容を見ると、創作活動の代わりに日本語教育を利用してその「抵抗意識」を表すことが張我軍の狙いの一つだと言える。このように日本の植民地出身のスティグマとされた日本語能力を生かし、日本語教育を通じて「反帝国主義、反戦争」を宣伝したのは、同化政策下の日本語教育への有力な反撃だと言える。

4.2 社会主義思想の普及と張我軍の日本語教育実践

「反帝国主義、反戦争」以外に、社会主義思想関係の内容が多いのも張我軍の作成した日本語教材の特徴の一つである。日本の台湾での植民統治の真相を暴くための張我軍の早期翻訳作品には「大婚二十五年御賜下金と植民地の教化事業」と『殖民政策下の台湾：弱少民族の悲哀』がある。この二篇の作者である安部磯雄、山川均はいずれも日本の社会主義者であったことから、張我軍が最初社会主義思想に興味を持ったのも植民統治に反抗する意識に起因していると推測できる。一方、日本語を通じて社会主義思想を学ぼうという当時の日本語学習者の要望により張我軍が日本語教材に社会主義思想関係の内容を取り入れた理由の一つで

あろうが、これまでの研究において張我軍のように意識的に日本語教育を利用して社会主義思想を伝えた人物は未見である。張我軍は少なからず社会主義思想の中国での普及に貢献したと言えるのではないだろうか。しかし、張我軍が伝えようとした社会主義思想は当時の学習者が学ぼうとしたものと合致していたかどうかは、今後の課題として検討しなければならない。

4.3 戦時期の張我軍の日本語教育

盧溝橋事件以降、再び日本の支配下に置かれた張我軍は教職以外に何の官職にも就かなかったが、「大東亜文学者大会」などのような日本による文化侵略と見なされた活動に関与していた。主業であった日本語教育においては、作成した教材の数が急劇に減り、新しく作成した日本語教材には「反帝国主義、反戦争」などのような「抵抗意識」の表出と見なされる内容もなくなった。しかし、日本支配下の淪陷区には言論の自由がなかったと考えられるので、張我軍のこれまでの「抵抗意識」は、まったく消失したとも言えない。日本語教育活動でも社会活動でも現時点で解明されていないところがまだ多く残っていることから、その主業であった日本語教育を手がかりにして張我軍の対日協力の実像を明らかにするのが今後の喫緊の課題だと考える。また、北京近代科学図書館の「日語基礎講座」に関与した状況から、張我軍が教授法や教師養成において華北淪陷区の日本語教育に大きな影響を与えたと考えられるので、具体的にどのような影響を与えたのかを解明することが華北淪陷区の日本語教育における中国側の関与についての研究にとっても大きな課題である。

4.4 台湾に戻った張我軍

1945年8月に、日本の敗戦に伴い張我軍の偽北京大学での教授活動が終了し、1946年に台湾に戻り、1955年11月に台北で逝去した。台湾に

戻った張我軍は日本語教育に携わらなかったが、復帰初期の台湾での中国語教育に多くの意見を提出すると同時に、『国文自修講座』という中国語学習の教材も作成した。かつての日本語教育の経験は台湾に戻った張我軍による中国語教育にどれほど影響を与えたのであろうか。このことを探求することも張我軍の日本語教育観を解明する方法の一つであると考えらる。

参考文献

日本語参考文献

- 晏妮 (2010) 『戦時日中映画交渉史』 岩波書店
- 鍾少華 (2003) 竹内実編著、泉敬史・謝志宇訳 『あのころの日本—若き日の留学を語る』 日本僑報社、2003
- 孫安石 (2003) 「戦前中国における日本・日本語研究に関する資料の調査報告」 『神奈川大学言語研究』 25、pp.299-315
- 張欣 (2000) 「張我軍と「大東亜文学者大会」」 『アジア遊学』 (13)、勉誠出版、pp.101-115
- 中島利朗・河原功・下村作次郎 (2014) 『台湾近現代文学史』 研文出版
- 中島利朗 (1989) 「張我軍について—その略歴と著作」 啞啞之会編 『啞啞』 24、25合併号、pp.20-47
- 北平近代科学図書館 (1937) 『北平近代科学図書館館刊』 (創刊号)
- 北京近代科学図書館 (1937) 『北京近代科学図書館館刊』 (第2号)
- 北京近代科学図書館 (1938) 『北京近代科学図書館館刊』 (第3号)
- 北京近代科学図書館 (1938) 『北京近代科学図書館館刊』 (第4号)
- 北京近代科学図書館 (1938) 『北京近代科学図書館館刊』 (第5号)
- 北京近代科学図書館 (1939) 『北京近代科学図書館館刊』 (第6号)
- 山口守 (2017) 「張我軍と映画『東洋平和の道』及び大東亜文学者大

会について」『大妻女子大学草稿・テキスト研究所年報』第10号、
大妻女子大学草稿・テキスト研究所年報、pp.5-24
葉石濤（2000）中島利朗・澤井律之訳『台湾文学史』研文出版

中国語参考文献

- 王向遠（2007）『王向遠著作集—日本文学漢訳史』寧夏人民出版社
王昇遠、周慶玲（2009）「中国日語教育史視閥中的張我軍論」『台湾研究
集刊』2009年第3期、厦門大学台湾研究院、pp.99-106
王申（2010）「淪陷時期旅台平籍文化人的文化活動与身分表述—以張深
切、張我軍、洪炎秋、鍾理和為考察中心」北京大学博士論文
田建民（2006）『張我軍評伝』作家出版社
何標（1994）「張我軍与“新野社”」『台声雜誌』1994年2月、台声雜誌
社、pp.46-47
張我軍編（1934）『日文與日語』（第1卷）北平人人書店
張我軍編（1935）『日文與日語』（第2卷）北平人人書店
張我軍編（1935）『日文與日語』（第3卷）北平人人書店
張光正（2002）『近觀張我軍』台海出版社
張光正（2012）『張我軍全集』（上、下）台海出版社
張光正（1993）「父親張我軍的二三事」『新文学史料』1993（01）、人民
文学出版社、pp.161-163
日語讀書會（1935）『怎樣研究日語』開華書局
楊紅英（2013）「論張我軍的台湾光復主張」『福建師範大学学報（哲学社
会科学版）』2013年第2期、福建師範大学、pp.8-12

参考教材

- 張我軍 (1934) 『日語基礎讀本』 (4版) 北平人人書店
- 張我軍 (1932) 『日本語法十二講』 人文書店
- 張我軍 (1934) 『日漢對譯詳解高級日文自修叢書』 (第1種) 北平人人書店
- 張我軍 (1934) 『日漢對譯詳解高級日文自修叢書』 (第2種) 北平人人書店
- 張我軍 (1934) 『現代日本語法大全：分析篇』 北平人人書店
- 張我軍 (1935) 『現代日本語法大全：運用篇』 北平人人書店
- 張我軍 (1935) 『日語基礎讀本自修教授參考書』 北平人人書店
- 張我軍 (1936) 『日語基礎讀本』 (7版) 北平人人書店
- 張我軍 (1936) 『標準日文自修講座』 (前期第1冊) 北平人人書店
- 張我軍 (1936) 『標準日文自修講座』 (前期第2冊) 北平人人書店
- 張我軍 (1936) 『標準日文自修講座』 (前期第3冊) 北平人人書店
- 張我軍 (1936) 『標準日文自修講座』 (前期第4冊) 北平人人書店
- 張我軍 (1937) 『標準日文自修講座』 (後期第1冊) 北平人人書店
- 張我軍 (1937) 『日語基礎讀本』 (9版) 北平人人書店
- 張我軍 (1938) 『最新日語基礎讀本』 天津世界圖書公司
- 張我軍 (1939) 『日語模範讀本』 (卷1) 日文與日語社
- 張我軍 (1942) 『對訳日本童話集』 (上卷) 新民印書館
- 張我軍 (1943) 『對訳日本童話集』 (下卷) 新民印書館
- 北京近代科学図書館編纂部 (1939) 『初級日文模範教科書』 (卷1) (8版)
- 北京近代科学図書館編纂部 (1939) 『初級日文模範教科書』 (卷2) (4版)
- 北京近代科学図書館編纂部 (1938) 『初級日文模範教科書』 (卷3) (再版)